

O2-024

A県における小児がん患児を育てる家族への子育て Q&A集の作成

桑田 弘美、白坂 真紀

滋賀医科大学医学部 看護学科

【目的】

本研究の目的は、小児がん患児・家族の入院から退院後の生活の困難さと工夫について調査した結果を受けて、ニーズの検討を行い、冊子の作成に至ったことを報告することである。

【方法】

1. 小児がん罹患した子どもを育てる家族13人に入院から退院後の生活の困難さと工夫についてインタビュー調査を行い、その逐語録を質的記述的方法で分析した。2. その結果を受けて、ニーズについて考察し提示した内容について滋賀県がん対策推進協議会小児がん患者支援専門部会で検討し、子育て Q&A集の作成に至った。3. 倫理的配慮本研究は滋賀医科大学医学部倫理委員会の承認を得た後、対象者に文書を用いて研究内容を説明し同意を得た。個人情報厳重に守るなどの約束をした。本演題発表に関して、開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

【結果】

小児がん患児の家族は、毎日の生活の場である入院生活のストレスを困難と感じ、退院後は再発の心配を常にしていたが、人との関わりへの工夫や良好なコミュニケーションが患児と家族の生活を支えていることがわかった。それを受けて検討した結果、入院中には《付き添う親への配慮》、《きょうだい児への支援》、《入院生活での制約の軽減とルールの順守》、《行き届いた医療と看護》、《院内学級や社会サービスを簡便に利用》、退院後には《病気に関する知識の更新》、《随時相談が可能》、《事故予防》、《教育との連携》、《正しい情報の伝達》と、それぞれ5つのニーズがあることが明らかとなった。そして、「滋賀県の小児がんの子ども子育て Q&A集」を作成し、入院中には「小児がんと言われました。どうしたら良いでしょうか」など25件、退院後には9件の Q&A を網羅した冊子を作成した。

【考察】

小児血液悪性腫瘍患者会のある親は、入院時はいきなりのことで、主治医の説明は頭に入らず、何を質問したら良いのかさえ分からなかったと話し、冊子の検討時にも、そうした項目がわかると安心すると話していた。入院中には多くの知識とスキルが必要であり、小児がんの子どもを育てる親にとって入院生活そのものがストレスであることを、改めて医療者は理解して支援することが大切であると思われた。今後、調査を続けながら、冊子の内容を定期的に更新し、患児と家族を支える礎になればと考えている。